

鉱工業生産 13年11月

～年度末にかけて増産ペースは加速する公算

経済研究部 経済調査室長 斎藤 太郎

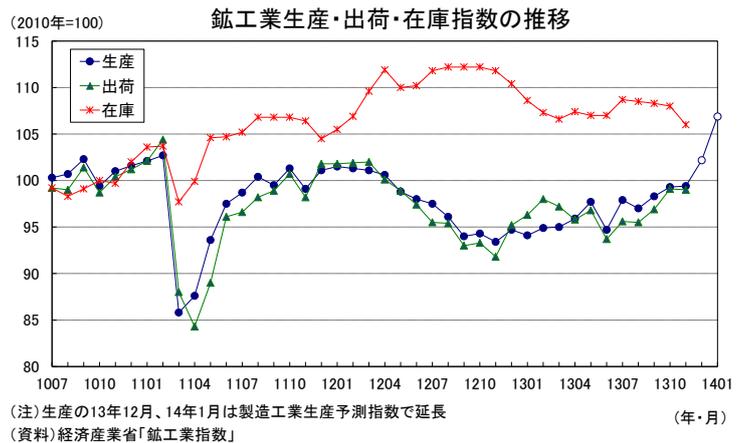
TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

1. 11月の生産は前月比0.1%にとどまる

経済産業省が12月27日に公表した鉱工業指数によると、13年11月の鉱工業生産指数は前月比0.1%と3ヵ月連続の上昇となったが、先月時点の予測指数の伸び（前月比0.9%）、事前の市場予想（QUICK集計：前月比0.3%、当社予想は同1.0%）をともに下回った。出荷指数は前月比▲0.1%と3ヵ月ぶりの低下、在庫指数は前月比▲1.9%と4ヵ月連続の低下となった。

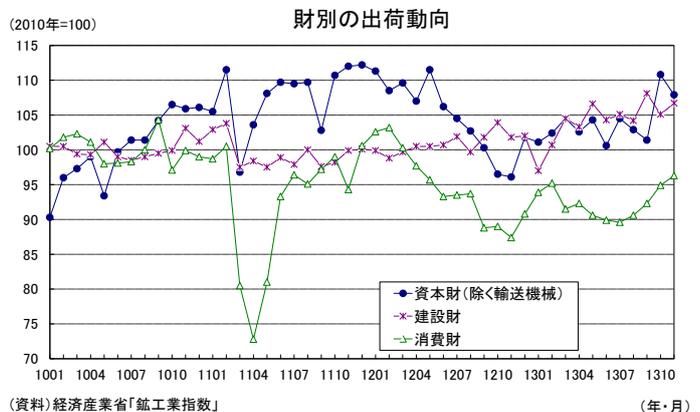
11月の生産を業種別に見ると、輸出の持ち直しや国内販売の好調を受けて輸送機械が前月比0.7%と3ヵ月連続で上昇し、デスクトップ型パソコンの大幅増産などから情報通信機械が前月比3.9%の高い伸びとなったが、設備投資の持ち直しを反映し10月に前月比7.1%の高い伸びとなったはん用・生産用・業務用機械がその反動もあり同▲2.9%と落ち込んだことなどから、全体としては低い伸びにとどまった。

速報段階で公表される15業種中、8業種が前月比で上昇、7業種が低下した。



財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は13年7-9月期の前期比0.4%の後、10月が前月比9.3%、11月が同▲2.6%となった。また、建設投資の一致指標である建設財出荷は13年7-9月期の前期比1.1%の後、10月が前月比▲2.8%、11月が同1.5%となった。10、11月の平均では、資本財出荷（除く輸送機械）、建設財ともに7-9月期を上回っている。

7-9月期のGDP統計の設備投資は前期比0.0%の横ばいにとどまったが、機械投資の先



行指標である機械受注がこのところ堅調に推移していることをあわせて考えれば、10-12月期の設備投資は前期から伸びを高める可能性が高いだろう。

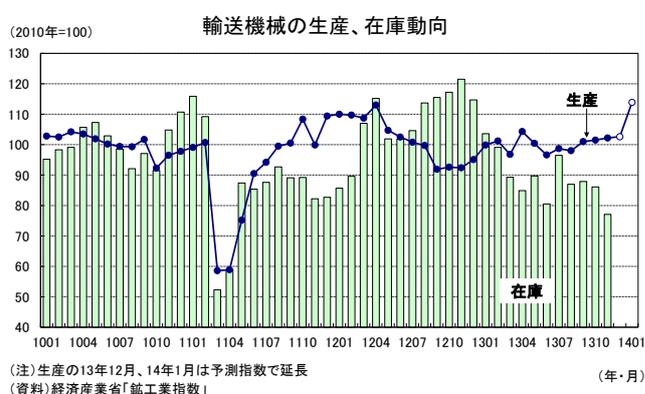
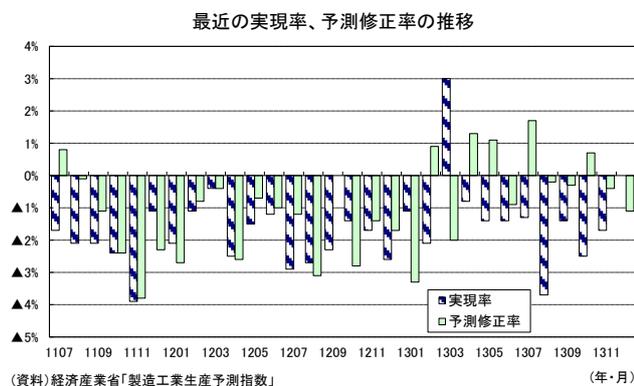
消費財出荷指数は13年7-9月期の前期比▲0.1%の後、10月の前月比2.8%に続き、11月も同1.5%の高い伸びとなった。消費税率引き上げ前の駆け込み需要が消費財出荷を大きく押し上げているものと考えられる。

13年7-9月期のGDP統計の個人消費は前期比0.2%の低い伸びにとどまったが、駆け込み需要の本格化を主因として10-12月期、14年1-3月期と伸びを大きく高めていく可能性が高い。

2. 年度末にかけて増産ペースは加速する公算

製造工業生産予測指数は、13年12月が前月比2.8%、14年1月が同4.6%となった。生産計画の修正状況を示す実現率（11月）、予測修正率（12月）はそれぞれ▲1.7%、▲1.1%といずれもマイナスとなった。鉱工業生産は持ち直しの動きを続けているが、生産計画が下方修正される傾向は変わっていない。

予測指数を業種別に見ると、設備投資の持ち直しを反映し、はん用・生産用・業務用機械が好調を維持することが見込まれる（12月：前月比3.4%、1月：同14.3%）ほか、1月の輸送機械が前月比11.0%の大幅増産計画となっている。輸送機械は駆け込み需要によって出荷が高い伸びとなる一方、生産は抑制気味となっているため、在庫水準が大きく低下している。輸送機械は年度末にかけて生産の牽引役となることが予想される。



13年11月の生産指数を12月の予測指数で先延ばしすると、13年10-12月期は前期比2.7%となる。生産計画が下方修正される傾向が続いていることを考慮しても、7-9月期の前期比1.7%から伸びが高まることを見込まれる。

先行きについては、消費税率引き上げ前の駆け込み需要に対応するため自動車などの耐久財を中心に大幅増産が見込まれることから、13年度末にかけて鉱工業生産の増産ペースは加速する可能性が高いだろう。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。